［研究論文］

# 心象とデータ・エビデンスの狭間に関する考察
## －大阪大谷大学人間社会学部の事例を中心に－

大阪大谷大学　人間社会学部　人間社会学科
教授　荻野　勝行

Ⅰ.はじめに

社会学の勉強を始めるとその領域の広さに愕然とする者もおれば、どのようなあるいは新たな領域を学ぶことができる社会学の奥深さに歓心を得る者もいる。現代社会において、社会学の勉強を進めて行けば、いずれかの領域にその方向性を決めなければならない。社会学においてこのような岐路が幾つかあるのではないかと考えられる。大学等の学部名称に社会学という語彙が含まれているものは多数存在するが、その学部学科において創設の理念や教育の方針もあり、それらがカバーする領域は個々に異なる。概ね社会学の前に付く連子符やカリキュラム等からどのような社会学を、あるいは領域を勉強することができるであろうかと言うことを解釈することができる。連子符が付かない社会学部や社会学科における場合、先に記した岐路の例を挙げると社会学系か、人類学・文化人類学系かに進む選択に遭遇する。同じ社会学部や社会学科であったとしても、社会学系と人類学・文化人類学系のアプローチの仕方や分析方法や研究性にはかなりの差異が存在する。社会学系の方向を目指した場合、次に遭遇する岐路は、理論系か実証系のどちらか、あるいは両方かというものが待ち受けている。社会学の巨人と称せられる偉人たちのほとんどは理論系であるが、社会学の現状に置かれている状況から、実際上、理論系だけで研究を進めて行くことはかなり難しいかと考えられ、社会学と言う学問の傾向上、多くの社会学の研究を更に進めて行こうと考える者、自分も含めて、実証系への進路を選択することを示唆され、それに従い、実証系への方向の道を辿ると考えられる。社会学はその誕生の所以から他の領域の学問と比較して自然科学に歩み寄る姿勢が強く、文系と言われる学問の中でも数値を多く用いる傾向があると言えよう。

また、その勉強や研究の進め方は、自然科学の方式に則って、仮説を立て、それを実証するために調査を行ない、その調査から抽出される数値をデータ化して、立てた仮説の整合性や問題点を焦点に考察が行われる。理系と言われる学問は実験等で獲得して数値をデータ化し、それらを演算し、仮説の信憑性を世に問うとする姿勢と現在の社会学が行っている社会調査で得た数値をデータ化し、それらを演算し、仮説の合理性を世に問うとする姿勢は、類似している点があると言えよう。これはとりもなおさず、現代の社会学が自然科学の学問の手法に寄り添い、自然科学が有する資質の土壌に社会学も立とうとする意識の現れであるとも考えられる。自己が立てた仮説の合理性を提示する際、多くの研究者は

それが正当であって欲しいと望む。ここで問われる案件は、社会調査の質問のセンスとそれによって得られた数値の分析力となる。如何に的を射る質問を提示し、調査対象者が有する意識を的確に抽出するか、そして、それによって得た数値を仮説の合理性の構築のために、演算し、仮説の土台の形成を試みることとなる。したがって、仮説の発想と合理性の立証は並存するところに、社会学の学問的意義が存するものと考えられる。提示した仮説は更にその後のリサーチで、強化されることもあれば、改良されることもあり、そのような過程を経て、仮説は確立を目指す道を辿る。

一連の作業無くしては、実証系の社会学の成立は難しいこととなる。このような過程に費やす労力と時間は膨大なものとなる。これまでの自己が社会学の研究を進めるに当たって同様の仕事を行い、そのような仕事の行い方に関して、疑いの意識を持たず、万進した。言い換えれば、それ以外の方策を自己が発見できなかった、あるいはそのような行為に関して時に立ち止まって考えることもあったが、有限的な時間の関係上、これ以外の施策を講じることに対して自信が持てなかったと考えられる。実証系の社会学の手法は概ねこのような流れで進むものと考えられよう。したがってこれまでの自己に与えられた課題は上記した方策で対応してきた。ただ、恒常的に自分の頭のどこかには発想という心象とデータ等に代表されるエビデンスとの比重の関係性についての思案である。豊富な労力や時間が確保されているケースにおいてはこれまで踏襲してきた手法を支持する。しかしながら、豊富な労力や時間が確保できない状況のケースに関しては発想や心象からのアプローチが優先されることは考えられないであろうかとする問題意識から今回、筆をとり考察を進めて行きたい。

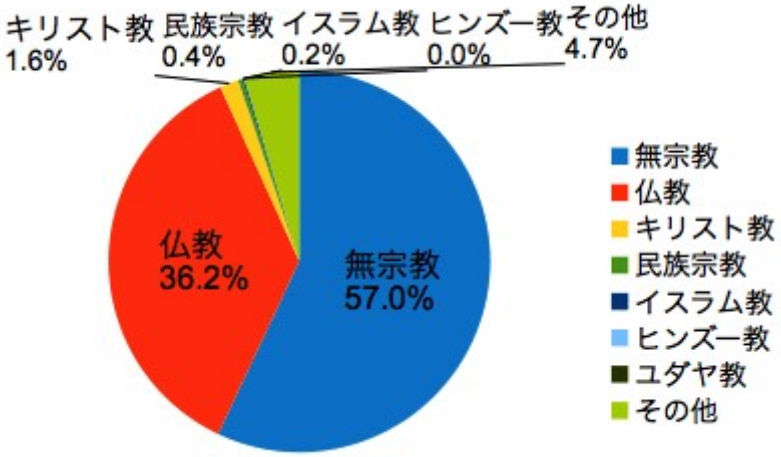
## Ⅱ. 日本人の意思決定のメカニズムについて

世界には多くの民族が存在し、それらの多くの民族はそれぞれの意思の決定と行動様式に関して、ある種の特性が存在するのではないかと考える学派がある。このように思考する学派や研究者は様々な方法を用いて、民族の有する特性を提唱している。日本人というカテゴリーにおいてもこのようなアプローチや提言は数多く存在する。その中でも良く知られているものは、ルース＝ベネディクト著の『菊と刀』に書かれている欧米の罪の文化と日本人の恥の文化を挙がることができる。また、日本人によっては和辻哲郎著の『風土』に書かれている人間像の三類型のモンスーン地帯おける日本人の特性として、自然の暴威に耐えながらも、自然の恩恵に浴し、ここに忍従的、受容的人間像が形成されるというものはこのような施策の代表的なものである。これら二つの著作は、それぞれ 1946 年、1929 年に発刊されたものであり、今から 70 から 90 年前に記されたものである。その間、日本は様々な時流を経験し、そこに暮らす日本人も世界的な時代のうねりを体験し、意思の決定のメカニズムや行動様式を変容させたものと考えられるが、この二つの著作は現代においても日本人の意思の決定のプロセスを学ぶ上において紹介されている。また、これらの

著作に関して様々な検討や後述がなされているものの、ある種、日本人のそれに関する姿勢を考察する際、これらの論理が全く意に沿わないではなく、部分的に現代の日本人の気質に通じるものがあると言えよう。

上に記した著作より 20 年後の 1977 年に発刊されたグレゴリー＝クラーク著の『日本人そのユニークさの源泉』において述べられている日本人の特性はついて、氏は世界の多くの民族が意思の決定や行動様式の根源に位置するものとして、一定の確立された宗教の教義やイデオロギーの存在があると説き、そのため他者から何らかの事象が生じた場合、その民族がどのような行動を選択するのかについてその民族が信奉する宗教やイデオロギーからレスポンスは予測可能な範囲に納まるとした。それに対して日本人はある一定の確立化された宗教やイデオロギーを核心的に有していないことから多くの民族のそれとは異なった方法から意思の決定や行動の方向性を行うと提唱している。多くの民族に対して日本人が用いるものはエモーシャル＝感情あるいは気分とし、そのためある事象に関しての日本人のレスポンスは予測可能な範囲を越えることがある点を指摘した。つまり宗教やイデオロギーを源泉とする民族の意思の決定や行動の方向性は予測が可能であり、それらの観念の延長線上の考察でそのレスポンスは概ね予測の範疇に納まるが、日本人はエモーシャル＝感情あるいは気分を源泉とするため意思の決定や行動の方向性は大幅に予測を越えることがあり、またそれは相対的な時間の尺度の縮小の可能性について言及していると考えられる。

このような提唱に関して定義された日本人自身はこれを理解しているか否かについての判断を下記のグラフを基に行う。




このグラフは日本リサーチセンター発刊の『世界 60 カ国価値観データブック』に記載された日本人の宗教意識に関するリサーチから作成されたものである。約 6 割の日本人は自己の宗教に関する意識に関しての回答は無宗教である。本当に日本人が無宗教であるかについて現代の映像等からはそのように映らない現象を眼にすることがある。日本人の宗教との接し方を見てみると多くの研究者が記述している通り、全く接触を行っていないので

はなく、特定の宗教ではなく多くの宗教と接触をもつ多層性信仰、シンクレティズムと称せられるものに該当するのではないかと考えられる。多くの宗教と関係を持つことと特定の宗教を信奉しないという意識や姿勢が無宗教と言う回答の根源にあると考えられる。唯一神教を信奉する民族からすれば、日本人のこのような回答に疑問感を抱き、社会進化論者から遅れているとの判断が下されることもある。しかしながら日本人自身はそのような反応に対してあまり意に介することはなく、昨今のハロウィンの社会現象からもその姿勢は維持されていると考えられる。このようなことから先に述べたグレゴリー＝クラークが指摘した日本人の意思の決定や行動の方向性の傾向の根底にエモーシャル＝感情あるいは気分が存することとそれに関して多くの日本人は意識していないことが考察できる。

反面、2023 年 1 月 5 日のプレジデントオンラインに記載さらたこうして＜陰謀論者が増えていく…モーリー＝ロバートソンが「日本人のクイズ番組好き」を危険視するワケ＞においては、日本人のクイズ番組好きの背景にあるものについて言及している。それは明確な解答を求める気質に所以するし、その態度は現実社会を渡っていく上においての問題点や他国の思考展開と総意について警鐘を鳴らしている。先に述べたグレゴリー＝クラークの論調とモーリー＝ロバートソンの言及に整合性を認めることはできないが、それに警鐘を説く論説に関してはグレゴリー＝クラークの論説への回帰を意図するものではないかとも考えられる。これらの両氏の論説を鑑みて、日本人の思考のメカニズムの一端と特性は感性に起因する傾向があるのではないかと考えられる。

## Ⅲ. 抽象と具体について

この章においては問題意識を明確に思索するために、抽象と具体という概念について検討を行いたい。抽象と具体に関する規定は様々な文献において散見することができる。『世界大百科事典 第２版』において抽象とは所与としての実在の世界においては分離されておらず，また場合によっては分離することが不可能な諸特性をことさらに分離して，それだけを思考の対象とする知性の働きをいう。具体に対する。みずからをかこむ環境世界の中からある一群の特性を捨象して,残りの特性を選別するという働きは,広い意味でいえば,最下等なものを含めた生物一般に,生存のための不可欠の能力として見られるものであり,そのかぎりでは人間に特有なものではないが，とりわけ高度に発達した分節言語を持つ人間においては，抽象の能力は他の動物とは比較にならないほど精緻かつ複雑なものになっている。と記されている。どのような文献においても抽象の意味はかくの如くである。そして、抽象の対義語は具体と記されている。抽象と具体に関する著作としては、細谷巧著の『具体と抽象 ―世界が変わって見える知性のしくみ』に非常に分かり易く解説が成されている。

また、近年抽象と具体をコミュニケーションギャップの克服を目指して多くの思考トレーニングに関する著作が出版されている。これらの著作の意図とするところは、抽象的な

ものを具体化することによって相互のコミュニケーションを円滑に行うあるいは具体的なものを抽象化することによって新たな思考スキルの獲得を目指すものである。兎角、現代の社会において一般的にこの二つのイメージにおいて抽象は難しく、理解し難い、具体は例を示し、理解を容易にすると受け止めがちである。そして、この二つの語句は対義語と言われ、反対の意味を有すると考えられている。国語的にはそのようであったとしても、この二つの語句は対義語であると共に対を成す存在であると考えられる。少なくとも今回の問題意識の解答を求めるに当ってはここに示した認識で論を進めて行きたい。まず、馴染みがある具体についてはその文字の通り、具体的や具体例と言ったようにある種の特性を提示して物事を説明する際に用いられ、他者がそれらを理解する上において有効に作動される。それに対して抽象の概念や意味を規定し、説明することは難しいことと考えられる傾向があろう。しかしながら具体はその事象が明示され、その明示の範疇外の思考を展開する上においては有用とは言えないものを含む、それに対して抽象は他者に幅広い思考の機会や範囲を提供することとなる。この２つの抽象と具体は他者が思考する上において双方ともに貴重であり、また、有用であると考えられる。現実的な状況においての思考は現状、具体の方向に傾いている傾向があるのではないかと考えられる。

Ⅳ. 社会学が考える時間との関係性について

時間という語彙は誰もが知っている。また、この語彙に関する解釈は個々、多岐に渡る。物理学の領域においての時間に関して解釈ではなく、ここでは社会学的な時間解釈について考察を行いたい。近年、社会学の領域においての時間に関する研究は、ハルトムート・ローザ著の『加速する社会 近代における時間構造の変容』のアクセラレーションの概念や高橋顕也が「社会学における多様な時間概念の公理を明確化」が注目されており、これからの社会学の領域における時間へのアプローチは益々高まるものと考えられる。時間は有限か無限かあるいは固有か共有かと言うことに関しての考察については、学問分野の差異で異なる。相対性の視座に建つ社会学においてもこれら両方が考察の対象とされる。個人や特定の集団内での時間は固有であり、無限であるとも考えられるが、他者や他集団との関係性において場合、時間は有限で共有されるものと考えられる。社会関係の成立を目指すのであれば、時間を固有すること、時間を無限的な存在と扱うとする発想で対応することは難しいと考えられる。しかしながら、社会関係の成立を目指さぬケースにおいて時間の固有と無限性は担保される可能性を残す。社会学の観点からの時間に関してのアプローチの一つとしてモーリス＝アルヴァックスの集合的時間の概念を挙げることができる。近年において氏の考えは金瑛等によって再考察されている。氏はそれぞれの社会集団は固有の記憶と共に必要や伝統に応じた時間についての特徴や属性といわれるものをある程度、統合的に意識の中で有し、そしてそれは集団構成員の生活リズムや時間的感覚に関与し、手段のアイデンティティを形成する上において一要因を成すと説いている。氏の社会集団

とはかなりマクロな存在と考えられる。また、それは継続的に集団性がある程度の時間維持されるべきものであるとも言えよう。このように時間を取り扱うことによって個人の記憶と集合的記憶の関係性について論は展開された。特定の社会集団においては個々なる時間を有する。したがってその集団の構成員はその時間軸の中で生活を送る。現代社会において当然のように個人は数多くの集団に所属している。個人が所属する集団の位置づけは個人の意識によって成される。その優先順位も個人の意識の中で形成される。このような意識の形成においては様々なファクターがあると考えられる。中でも個人の自己実現願望や生計を担う社会集団の位置づけは上位に存すると考えられよう。このような構図が維持されるケースにおいて特定の社会集団の集合的時間が個人に及ぼす影響は多きものと考えられる。また、個人もその集団に属し、その継続を念頭においているのであればこれに準拠する。このような場合個々の者はこの風潮に身を委ねる傾向が合うのではないかと考えられる。

Ⅴ. 事例

Ⅱ. Ⅲ. Ⅳの考察を踏まえて、これを本学に人間社会学部人間社会学科をモデルに考察を行いたい。我々はデータやエビデンスに論拠を見出そうとする。研究者と言う立場に存する者にとってその姿勢はゆるぎないものである。現在進められている本科の改組や新学科の創設はこのような根幹によって成されているものと考えられるし、思考や試案に対しての評価は全て正解と言えよう。本学科は文学部コミュニティ関係学科が発展型である。文学部コミュニティ関係学科から人間社会学部人間社会学科へと名称の変更を行う際にどのようなデータやエビデンスが用いられたかについて明確なものを眼にしたことはない。しかし本学の人間社会学部人間社会学科の名称はカリキュラムに準じて文部科学省から認証を得ることとなった。この名称に関してはⅡで述べた通り心象にようところの比重がかなり存したのではないかと考えられる。人間社会学部の創設に当たりスポーツ健康学科が併設されその効果もあって近年まで順調な歩みを遂げた。人間社会学部の順調な歩みは一つの学科名称が人間社会学科、もう一つの学科名称がスポーツ健康学科であったところに依拠するのではないかと考えられる。前者の名称はⅢで述べた通り抽象性を含み、後者の学科名称は具体性を表現している。この抽象性と具体性のコンバインドが存するところにこれまでの歩みの礎を見出すことができる。また人間社会学科は 4 つのコースからなる。4 つのコースは心理・社会福祉・現代社会・経営情報である。これらの４つのコースの名称に関しても前者二つは具体性を後者二つは前者と比較して抽象性を有する。現代社会の以前の名称は国際社会であり現代と国際と言う語彙の間における抽象度や具体度は図る尺度を持ち合わせていないが国際から現代への名称の変更は社会的な評価を得た。この名称の変更に関してもそれに当たるデータやエビデンスは如何なるものかそこにあったものは心象ではないかと考えられる。つまり人間社会学科の順当な歩みにはカリキュラム変更等の

具体的施策と共に心象的なアプローチが関与しているのではないかと考えられる。科学の名の基で執り行われる作業は多くのケースにおいてデータやエビデンスに根拠を求める。このような思考様式は欧米の自然科学の流れの上に立つ、一方日本人の思考様式の傾向にはⅡで提唱したものをも含む。またⅢで提唱した通り具体と抽象の思考から二つの思考の並存が人間社会学部と人間社会学科の歩みに関係しているのではないかと考える。

次にデータやエビデンスの構築は先述した通り豊富な時間と労力によって形成される。これらが存在する上において吟味されたデータやエビデンスは提示されることとなる。Ⅳで述べた通り社会集団はそれに応じた集合的時間を有する。他の集団との関係性を考える際、その集団が浸っている集合的時間だけでは対応が難しくなるのではないかと考える。その時間は相対的なものである。集合的時間の中だけではなく、相対的な時間を考えると方策の構築に必要とされるデータやエビデンスを構築する時間の有限性と向き合わなければならない。差し迫った状況においてはデータやエビデンスに依拠することは難しいものとなろう。このようなことからデータやエビデンスによる考察は既に現状成されているものと考えられる。そして相対的な時間を考えると心象からの発想にある種の価値が芽生えるのではないかと考える。計画の遂行におけるデータやエビデンスの重要度に疑いはない。そこから想起される思考を仰ぎつつ、時間との兼ね合いにおいて心象からのアプローチがプラスすることが肝要ではないかと考察する。

## Ⅵ. おわりに

様々な学問においてその学問の研究を進めて行く手法はその学問がこれまでに成されてきた方策と新しい手法のコンバインドでより良い方向に導かれるものと考えられる。社会学はその学問的成り立ちやその後の発展の経過から理論から実証へそして実証から理論への過程を経ているのではないかと考える。この図式を形成する根底にある思考はⅢで述べた通り抽象と具体との往来であると言えよう。自己の考えを他者に伝え、他者の理解を得るため私達は具体例を示すし、その具体例の根拠を数値・データで補完する作業を行う。この作業には多くの労力と時間が必要とされる豊富な労力と時間によって算出された数値やデータはエビデンスとなる。私達がエビデンスを構築するためには労力と時間が必要とされる。では、過去の人々の思考を考察する際に必要とされるエビデンスの構築の方策は如何にして成されることが可能かという問題が生じる。今回の問題意識の根幹はそれを考え、そこから導き出される発想によって想起される思考を明示することである。そのようなことから人間の二つの思考モデルを考えてみることとした。この二つは宗教やイデオロギーに求めるタイプとそれ以外のエモーシャルや感情といった感性に重きをおくタイプである。日本人の思考様式の底辺部には後者的傾向があると考えられる。また、他者への意図の伝達に関してはⅢで具体と抽象の概念の考察を加えて、双方の考察の並存性と特性と重要性に関して考察を進めた。具体は他者に意図を伝達するあるいは理解を得るために有

効な手段であることは衆知である。しかしながらこれを用いる際、意図の伝達に伴うエビデンスの構築に要する時間と労力の問題性を考えなければならない。これに関する考察を行うために相対的な時間と集合的時間の概念からアプローチを試みた。そして、このような考察で得た理念型を事例に当てはめて検証を行った。ここまでの作業は考察から心象とデータやエビデンスと言われる存在の関係性は極めて密であり、相互に補完的であることが理解できるのではないかと考える。

次にこのような考察から浮上する模索をについて述べたい。現在、本学部で行われている検証や模索は全て正解であると言えよう。これに付加的に心象からのアプローチが成されることが更なるプラス要因になるのではないかと考ええる。その一つとして情報ＩＴ革命の恩恵で多くの数値やデータを得ることは広範に可能となった。また、情報を得たいと考える立場ではこれによってこれまでには触れることが難しいと考えられてものへのアクセスを可能とした。これが時代の潮流である。数値やデータの構築は先述した通り労力と時間に比例する。そのため労力と時間を費やすことによって作成されたこれらには明確な差異が生じる。このような領域における判定は鮮明になされる。人々の思考は鮮明性の領域だけで形成される。人々の思考はこのような構図の上で全て形成されるのであれば非常に理解し易いものと考えられる。そこに加味される要素の存在を模索することの可能性にについて、一例はそれぞれの大学や大学の学部は一応にクラウド上にホームページを有する。多くのそれらは同様にツールや形式で構成されている傾向にある。あるそれらのホームページから固有名詞を除いた際、それらの特定は可能であろうかの視点での考察はなされているかどうか、特に利便性への傾倒によって特質がスポイルされているのではないかと考えられる。象徴的な事物や事象を有するそれらはそれらによって確認がかのうとなる。では、それらを有しないものにおいては有するものと同様のホームページの効果性へのアプローチが必要となれるのではないかと考える。また、先に記した通りデータやエビデンスの構築に際して汎用ではないものの重要性の考察が必要ではないかと考える。それを知る一つの方策の術を本学は有していると考える。データの構築において重要と考えられるファクターの一つに母集団の限定を挙げることができる。過去の人々の意識の分析は難しく、データ化する困難性があるものの、幸い本学の教職員の中には多くの本学のＯＧやＯＢが存在する。そのＯＧやＯＢが本学を選択した根底にあった思考を現在リサーチすることは可能ではないかと考える。そこから導き出されてデータや数値は本学固有のものとなり、汎用的なデータと共に有効に機能すると考えられる。時間との関係性については先に述べた。施策を講じる正統的でオーソドックスな手法には多くのそれらが必要とされる。そのような状況において心象からのアプローチが有効に作動されるのではないかと考える。人間は何を基に自己の進路を決定するのかという命題の一つに安全と安心がという意識が存する者と考えられる。私達に歩むべき方向性の決定には確率がありより高い確率を選択する。科学的思考はデータやエビデンスによってこの確立性の向上から定理や理論を構築

する。本学に求められるものも同様であるとするならば、安心と安全を担保する施策の具現化の提案があったとしても良いのではないかと考える。このような思考から入試について考察をしてみると、受験生やその保護者にとっての受験に際しての関心事は合否であるとするならば指定校の考察においての積極的な柔軟性が考えられよう。また、大学入学後の講義や授業においての評価に関して試験が行われることが多くある。時にその際、付帯条件として持ち込み可と記されていることがある。大学入学後の講義や授業の評価においてこのようなシステムが導入されているが入学試験においてあまり記されていることは少なく、このような入試形態が提案されても良いのではないかと考える。

最後にアメリカの心理学者のあるアブラハム＝マスローは様々な領域に関しても進言を行っている。中でも集団に関して、集団への所属は手段的行為であるが自己欲求的行為でもある。集団の目的が明確でないほど、自己欲求的行為の側面は強化されるとする旨を述べている。集団に一体性を持たせるのであれば、集団の目的は明確化されることが望まれる。このような考えを本学に当てはめてみると、学生の偏差値の向上を目的とするのか、定員の充足を目的とするのか、今日、一体的な集団の運用を考察すると目標の平坦化が重要ではないかと考える。

参考文献


・グレゴリー・クラーク　(著)，村松 増美（翻訳） 1983
『日本人―そのユニークさの源泉』サイマル出版
・モーリー＝ロバートソン　2023 年　＜陰謀論者が増えていく…モーリー＝ロバートソンが「日本人のクイズ番組好き」を危険視するワケ＞　プレジデントオンライン
https://president.jp/
・山折 哲雄　(著)，川村 湊（著） 1988 『宗教のジャパノロジー―シンクレティズムの世界（「現在」との対話)』作品社
・橋爪 大三郎 、 島薗 進　2020 『人類の衝突：思想、宗教、精神文化からみる人類社会の展望』 サイゾー
・Ruth Benedict　1951　The Chrysanthemum and the Sword　IBC パブリッシング
・和辻哲郎　1979　『風土：人間学的考察』 岩波書店
・日立デジタル平凡社　 1989 『世界大百科事典 第２版』　平凡社
・細谷 功　2014 『具体と抽象 ―世界が変わって見える知性のしくみ』　dZERO
・電通総研、日本リサーチセンター　2004 『世界 60 カ国価値観デ-タブック』同友館
・モーリス・アルヴァックス、 鈴木 智之　2018 『記憶の社会的枠組み（ソシオロジー選書)』　青弓社
・ハルトムート・ローザ（著)，出口 剛司（監修，翻訳） 2022
『加速する社会 近代における時間構造の変容』　福村出版
・高橋顕也　2016 『社会システムとメディア：理論社会学における総合の試み』ナカニシヤ出版
・金　瑛　2010 「アルヴァックスの集合的記憶論における過去の実在性」『ソシオロゴス』34，25-42 頁